
ワンピース 天狐

人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワンピース 天狐

【Nコード】

N2002Y

【作者名】

人

【あらすじ】

神（仮）に転生させられ天狐の力をてにいれた人の話です。ここ
の天狐はほぼ自分のオリジナルです。自分はワンピースをあまり知
りません。

処女ですが、よろしくお願いします。

2話

さて、何か起きたら森だった。

いやいやいや。ないないない、だってあれだもん俺死んだもん。光がきて落とされたけどいくらたんでもこれはない。そうだ！ない！これは夢だ！そうとなれば寝よ。

ん？なんか紙がある。なにになに。

『よ、ちゃんと本文読んでるか？まあいい。とにかく用件だけ箇条書きでかいてくぞ。』

・お前もしつてのとうりお前は死んだ。赤ん坊に押され津車に轢かれるというドンマイな死にかたで。

・そこはONE PIECE の無人島の一つだ。いちよう紙の近くに悪魔の実をおいといた。

・そこは結構危険な生き物もいるから気を付けるよ？・身体能力は鍛えればその世界最強クラスになるから。

じゃ最後に運命かってにこわしてごめんね（笑）』

「ふ、ふ、ふ、ふざけるなああああああ！！！！」もつと説明くれ！

じゃいちよう悪魔の実でも食べますか。

まず…。まあいいや。「とりあえず能力の確認と体術や体きたえなくちな。」

そういつて森のなかに斎藤は姿を消した。シッポがあることにきずかずに。

3話

どうも、たつきです。 あれから五年たち、能力、体術ともにだいぶましになりました。(ちなみに今の歳はたぶん16歳です。)

悪魔の实の能力は動物系イヌイヌの实モデル天狐でした。これすごいんですよ！まず人の姿のときは妖術モドキがつかえ、人獣型のときは妖術+四尾+千里眼がつかえ、獣型のときは妖術+四尾+千里眼+七色に輝く体毛(一本一本が鋼鉄のように固く、覇気も纏える。) +神通力。

あれ？最強クラスじゃない？この小説のキーワードの弱チート早くも崩れてない？(メタ反対いいいいいい！by作者)

今は体毛に覇気(霸王色は持ってないです。)を纏い、それを飛ばせないかなあと考えています。

ちなみ、原作にはちよくちよく介入しようと思います。

にしても暇だなあ。何か来ないかな。この島の獣全て手なずけたからなあ。海賊とかきたら面白いのにな。まあザコ限定だけど。バギー並の奴がきてほしいな！まったく、本当に最近喋ってないから声がでなくなりそう。

side海賊

くそ！あんな怪物海軍相手に出来るか！

「おい！お前ら！とにかく近くにゐる島までにげりぞ。そこで水と食料を手にいれ、また逃げるぞ！」

くそ！くそ！こんなはずじゃなかったのに！ただいつも道理町を襲っただけなのに。まさか中将がゐるなんて！

「島だぞお！」

やっと見つけたか。

「よおおし。上陸だ！さっさと水と食料とってこい！」
早くしないとおいつかれてしまう！

side???.?中将

やあやあ、わしはガープじゃ。

さっきよった町で海賊が襲ってきたから反撃したらあっさり
りにはおった。

まったく、齒応えがないのお。あんなどこでも懸賞金50
00万ベリーだなんてのお。

お！島に上陸したな？ふっふっふっ。さっさと捕まえて
寝るとするかの！

4話

こんにちは！たつきです！

だだいまめんどくさいことになっています。

「そいつが貴様の言っていた漂流者か、ガープ？」

「おう！なかなかの強さを持っているぞ！センゴク！」

な・ん・でセンゴク元帥の前にいるんだあああああああ

あ！

～～～回想～～～

暇だ暇だあ本当にだれか来ないかな。

「……………は…ちんたらするな！」

お！誰かきた！さっそく話してこよ！

side 海賊

今はまだ海軍はみえねな。今内に作業するか。

「船長！何かへんなやつがいます！」

「なんだ変なやつって！もっと詳しく話せ！」

「それが、いきなりガキが森から出てきて、口をパクパクしてりんですよ。」

まったくめんどくさいな！

「どうでもいい。殺せ。そんなことより早く作業しろ！」
無駄な時間取らせやがって。

銃てこんなにもかるいの？妖術でらくに剣や銃は壊せるし、あたつても痛くない。つまんねええええ。

でもまだ人は殺せません。もつぱら気絶してもらっています。

あ、何かでかいの来た。

「オイ！お前俺が『大砲』のガリクと知っているのか！賞金5000万ベリーだぞ！」

いや獣にそんなこと言っても無駄しよ。しかも足ガタガタなってるしwww 返事してやりたいけど声出ないんだ。まあ気絶してくれや。

「来るな！来るな！来るなああああ！」

大砲打ってきたよ！ま、きかないど。ちよつと痛いだけだ。

尻尾で大砲を壊して、はい、終わり！あつけないなあ。

あれ？もう一隻来る。あれは……海軍！？

side ガープ

さてと、あのアホに愛の拳骨をくれてやらんとな！

「中将！海岸に海賊たちか倒れています！」

なに！どういうことじゃ？あの島は無人島で猛獣しかいないはずじゃ。

「猛獣はおるか？」

「いえ見当たりません……いや、あれは……中将！男が海賊たちの近くで手を振っています。」

ふむ。漂流者かの。

「よし！あの男のところまでいくぞ！いろいろきかねばならん」

「「「はっ！」「」「」

side たつき

なんか来たなあ、てあれガーブじゃない？え？なんである大物がここにいるの！

「お前がこれをやったのか？」

コク

「なぜ声をださん？声がでないのか？」

コク

「お前さん、漂流者か？」

コク（俺みたいな人間はこのほうが妥当だろ）

「わしらはみてのとうり海軍じゃ。わしらについてくるか

？」

コクコクコク

「よし！では詳しくは船のなかではなぞ」

「はあやつと人の住んでる場所にいけるのか。」

楽しみだな。

やっぱりこのまま海軍に入ってしまうのがいいのかね？でも人は殺せないしなあ。まあ成り行きにまかせよ。

元々一部の海賊以外虐殺とかやってそうだしな。よし、がんばっていこう！

五話

s a i d センゴク

ふむ、ガープの連れてきたこの少年、なかなか強いと言っがどの程度のものか。 「君はいつからあの島にいるのかね？」

「五年間です」

「何故漂流者になったか覚えているのか？」

スミマセン。記憶がなくて

ふむ、

しかし あの島には猛獣がいたはず……

「あの島には猛獣がいたはずだが？」

「まだ漂流者になったばかりのころに悪魔の実を食べたので生きることができました」

「なんの実だね？」

「イヌイヌの実モデル天狐です」

なんと！幻獣種か！

「そうか。そうだな……准尉から初めてもらっか。」 今、海軍は人手不足だ。貴重な人材はしっかり育てなくては。

「ただし！お前がめんどろみろよ！ガープ！」

「ワハハ。まかせんかい」

「そういえば名前を聞いていなかったな。名は何て言うんだ？」

s a i d アウト

s a i d たつき

こんにちは。いきなり少尉になったたつきです。

まてまてまてまて。え？いきなり？こんなガキに？少尉？なくね？ま、こんなお偉いさんに意見なんてできないけどね！

「そういえば名前を聞いていなかったな。名は何て言うんだ？」

ミスった。どうしよう。

「グルです」

「なんかまあいいだろ。」

「プの所でがんばってこい」

「はい！」

「ま、なんとか原作介入できる所に来たな。」

「えつと、タツキ・イー

うん。ぱつと思いついたけど

「タツキか……分かった。ガ

「なんて、どうでもいいことを考えていたこともありません。

「今、僕は死にそうです。」

「ほれほれ、避けないと死ぬぞ。」

「無茶、な、こと、言わないでください！人獣型、にも、ならず、こんなの、無理です！」

「ガープ中将に拳骨流星群くらってます。なんとか教えて貰った六式の内のなかで覚えた剃と月歩で何とか避けていた。」

「あゝ疲れた！」

「鍛えがたりないんじゃない？」

「誰もあんなの無理ですよ

！それこそ大佐並みじゃなきゃ！」

「いや、難しいから……」

「この人は、ガープ中将の船で副官をやっている方で、いつもサボる中将のお目付け役だ。かなり強い。が、これでも海軍本部大佐のなかでは弱いほうだという。つまり、人外がたくさんいるんだね分かります。」

「ところで貴様のようじゅつ……といったか、そのバリエーションを増やせ。いくらなんでも少なすぎる。」

「そうだね。タツキ君は六式も使えるようになったし、妖術の種類と六式の熟練度を上げたら、人獣型や獣型にならなくても十分憶並みの海賊とも鬪えるよ。」

「そうなんですよね。今は“狐火”（自分の周りに火を作り、それで攻撃します。妖気によって大きさは変化可能）と幻術の類い

しかないし、幻術も覇気使いにはほぼきかないですしね。なにか案
ありませんか」

今は本部の訓練所です。中將がサボっていたので探しに来た僕
と大佐が訓練されています。

「しらん！自分で考えろ」

「そうだね。空飛んだり、風や水、土を操れないかな？」

みなさん。今の答えでガープ中將の適当さ分かりましたか？

にしても、空を飛ぶのは妖術の源の妖気を足場にするか。風な
どは神通力じゃないと無理だと島で分かったからな。うーん。そう
だ！分身作れないかな。

「決まりました。空飛ぶのと分身を作れるようにします。風な
どを操るのは獣型にならないで無理ですから。」

「そうかいがんばってね？それじゃあ中將書類かたずけましょ
うか！」

そうだ！そのために来たんだっ！

「逃がしませんよ！」

「離せ！」

「嫌です」

人獣型になり逃げようとしていた中將を尻尾でつかむ。

「さあ楽しい楽しい書類仕事 awaits してますよ。」

「いやじゃあああああああ！」

ま、中將が悪いんだけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2002y/>

ワンピース 天狐

2011年11月27日12時46分発行